
天才は踊る

ちょび

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天才は踊る

【Nコード】

N9574A

【作者名】

ちよび

【あらすじ】

天才発明家は悩んでいた。小説家や漫画家がストーリーで悩む様に、次は何を発明すればいいのか。何気なく立ち寄ったフィギュアスケート会場で博士はヒントを見つける。

ペール・ギュント第一組曲第四樂章『山の魔王の宮殿にて』。

弱音で始まる情感のこもった演奏ではじまるとともに、男女は氷のリンクへと入場をする。放浪の旅の末に魔王の娘アニトラに出会うペール。アニトラの誘惑に負け、観念し遂に婚約の約束をし、誘われるがまま魔王の城に入るペール。二人を見つけ騒ぐ小鬼達。演奏が盛り上がるとともに氷上の男女の動きも躍動を持つ。スピードはより速く、二人の息は重なり続ける。

そして、魔王より明かされる事実「魔王の娘と結婚したものは怪物になる」を聞かされたペールはアニトラを振り切り逃げ出す。追うアニトラ、騒ぎ暴れる小鬼達。

本当に逃げ出すかのような男の滑りに、リンクが小さく見えてくる。その勢いのある滑りから、男がつまづいた事さえ、逃げ焦るペールに重ね合わせた演技なのかとすら素人には思えてしまう。

そんな二人が拍手で見送られた後、観客の一人がこう言った。

「音も表現も、二人の呼吸も良かった。でも、最後のアレはまずいね。つまづきは演技にはならない。あそこさえミスらなければ、完璧だったのにね」

わざと周りに聞こえるように言っているのか、ツウぶった口調で一緒に来ているのであろう女性と話している。

そして、それを聞いて目を輝かせる腹のた老機械工学博士がいた。顔をにやつかせながら隣の若い助手へと話しかける。

「藤間君、これだよ！ これなんだよ！」

「え？何ですか？」

「藤間君、君は鈍いね。鈍いんだよ？」

「……。繰り返さないでも分かります」

馬鹿にされるのは慣れている様子の助手だったが、さすがに場所が場所。視線を気にし辺りを見渡していたが好奇心に勝てず「で、何に気づいたんです？」と尋ねた。

「そんなんだから助手どまりなんだよ？ 成長しないな。成長してないよ！」

また慌てて回りを見回しながら「ハ、博士、虐めないでくださいよ」と老機械工学博士の耳元で急ぎ呟いた。

「聞きたいかい？ 聞きたいんだね？」

藤間助手の言葉を待たずに博士は続ける。

「フィギュアスケートだよ、フィギュアスケート。フィギュアといったら何だね？ 何だと思うかね？」

何度と無く繰り返された事なのか、考えたフリをして藤間助手は「何です？」と言った。

「フィギュアといったら人形だよ。人形。分かる？ 分からないかな？」

分からないから助手なんだもんね。分からないよね」

「……。五月蠅いですよ」

ボソリと思わず言ってしまった藤間助手に、待つてましたと言わないばかりに博士は

「君は私を馬鹿にしたんだね？ したんだよね？」

慌てる藤間助手に挟む言葉を持たせないまま

「助手って響きが気に入らないのかな？ 気に入らないんだろうね。助手って二文字が嫌なのかな？ 嫌なんだね？ 我儘だね、藤間助手は」

「いや、そんな事は」

慌てる藤間助手。

「いやいや、分かっている。分かっているんだよ？ 私は博士だから。」

そつだねえ、せめて肩書きくらいは私に勝ちたいよね？ 勝ちたいはずだね？

だから私は考えたよ。たった今。

聞きたい？ 聞きたいよね？」

「えーっと、別に聞きたくないような？」

博士は大きく頷きながら「そうか、そうだよ」と言い、

「助手代理って良いと思わない？ 思うよね？」

何ていったって私の肩書きの二倍だよ。当社比二倍なんだよ？」

「いや、それは別に凄くないっていうか。落ちているような？」

「いやいや、私の二倍偉いハズだよ」

頂垂れる藤間助手に、博士は「給料は半分だけだね。肩書きが二倍になったんだからいいよね？ いいはずだよ」と声を小さくし続けた。

「っえ？ ちょ、ちよっと！」

「ツチ。耳は良いんだね」

そっぽを向く博士の肩をつかみ、自分の方に向かせながら「そんな！」と藤間助手。

「『良い』ハズが——」

振り向かせた博士は、これでもかというくらい笑顔。やってしまったと気づく藤間助手。慌てて言葉をつなげようとするが遅かった。「おお、『良い』んだね。『良い』と言ったよね？ 言っただもんね。」

「いやいやいや、言いましたけど。確かに言いましたけど！」

「うんうん。賢いなあ、藤間助手代理は。賢すぎる。賢すぎるんだよ？」

しばらく博士の目を見つめ、がつくりと肩を落とす藤間助手。次のプログラム曲であるブッチー二のトス力が流れ始めると博士は「戻るよ」と言い出口へと歩き始めた。その途中、

「君にとつては悲劇でも、僕の視点に変えると喜劇なんだよ。分かる？ 分かるかな？」

「分かっています！ っというか、やっぱり楽しんでたんですか…

…」

後ろ手を組み、体を揺らしながら前を歩く博士。

「発明は視点を変える事が大事なんだよ。」

分かる？ 分かるかな？」

自分を落착させるかのように、体全体でため息をつく

「で、博士。このままラボに戻るんですか？」

振り向くこともしないで、早歩きで歩く博士。

「スポンサーを見つけにいくよ。今夜は接待だ」

「……。そのお金ってひよつとして」

「ひよつとしなくても、その通りだよ。その通りなんだよ？

いいじゃないか。少しばかりのお金が、莫大な資金になるのだから。」

現代の錬金術ってね。分かる？ 分かるかな？」

「いや、分かりますけど」

会場の外にでると博士は振り返り、

「君は早くもMVPだね」

これでもかと肩も視線も落とした藤間助手。自然と博士の出っ張ったお腹に視線がいく。

「はっはっは。私のお腹は食べられないよ？」

うーんと考え「まあ、肉で行ってみようか」と自分のお腹をさする博士を、色んな意味で食えないよと思う藤間助手だった。

見事スポンサーを見つけ、その足でタクシーを使いラボへと移動する車中。カバの様に酒を飲み、これまたパンダが笹を食べるようにステーキをモシヤモシヤと、ひたすらに食べ続けた博士はようやく本調子といった感じになっていた。

「で、藤間君。私が何を作ろうとしているか分かったかな？ 分かっていないんだろうね？」

店から貰った冷たいタオルを顔に乗せたまま藤間助手は応える。

「明日からにしませんか？」

「藤間君。私の質問に応えてないんだよ？ 応えるべきなんだよ？」

小さく「つつ……」と言ったまま寝息を立て始める藤間助手をしばらく眺めたあと、ため息混じりに博士は続ける。

「まあいいけどね。まあいいんだけどね。」

戻ったまま来なくても。もう来なくていいんだよ？」

ずるずると体が滑り落ち、窓の方を向く藤間助手。鼻をすする音を聞かせないようにと、いびきをたてている。

「まあ、そんな事はどうでもいいんだけどね。どうでもいいんだよ？」

動く事も応える事も止めたのを感じた博士は、本当にどうでもよかったことのように言葉を止めない。

「まあさ。君も分かっているだろうけどね。分かっているよね？」

僕はさ、ただ性能が良くなったりとか、機能を増やすだけの開発は嫌いなんだ。嫌いなんだよ。

もちろん素晴らしい事だと思うよ。素晴らしい事だ。

僕の開発に役に立つ事もあるしね。役に立つ事もあるんだよ？」

全く反応の無い助手を見つつ、つまらなそうにため息をつく博士。

「私、発明とかは良く分かりませんが興味があります。教えていただけませんか？」

にこにこ笑いながら中年の運転手が変わりに合いの手を打つ。

「知りたい？ 知りたいんだね？」

少しも車を揺らす事なく赤信号で車を止めたあと、振り返りながら運転手は尋ねた。

「はい。教えていただけますか？」

本当に興味があると、微笑みながら続けた運転手に博士は満面の笑みで応える。

「私はね、思うんだ。思うんだよ？」

人が考えてなかった事を発想する事こそが有意義な発明だってね」
ほほうと小さくつぶやき、運転手はしばらく考えたあと、

「ただ性能を伸ばすとか機能を付けるだけなら、
誰でもできるからですか？」

キラキラと目を輝かせ、博士は腕組みをし「うんうん」と満足げに頷いている。信号は青になり、これまた車を揺らす事なく発進する様を見て、博士はさらに「うんうん」と足す。

「私はね、ロボットを作ろうと思うんだ。思うんだよ？」
「ほほう。凄いですね。」

どんなロボットなんですか？」

「私はね、フィギュアスケート見に行きましてね。
思っただんです。思っただんですよ？」

素晴らしいなど。本当に。本当なんだよ？」

選手が音が小さくなると、こう、片足で回転しながら沈んでね。
音が大きくなるにつれ、こう、片足で回転しながら立ちあがって
ね。

音の切れ目で跳んだりね。どんどん、どんどん引き込まれていっ
たんだ。いったんだよ？」

身振り手振りしながら話す博士をバックミラー越しに見ながら、
運転手は丁寧に運転を続ける。

「おっと、前フリが長くなっちゃったね。長すぎたよね？」

まあ、それでね。それでなんだけどね」

すうっと息を吸い、

「フィギュアロボットを作るんだ。作るんだよ」

吐いた息と一緒に両手を広げる。手が藤間助手に当たっても気に
しない。

「それも完全無敵の完璧ロボットをね。」

フィギュアといえば人形。人形なんだよ。

動いたって間違いじゃあないよね？」

そうですね。楽しみですと変わらず相槌を打ち、ラボの玄関にそつと車を停める運転手。

「今度はタクシーの中ではなく、ニュースでお見かけするんでしょうね」

「もちろんだよ。もちろんなんだよ」

助手のポケットから財布を抜きつつ話す博士から、当然の様子にお代を受け取る運転手。

着いてすぐ、研究者を呼び集め全員で藤間助手について20分ほど語り合い「じゃあ本題だよ」と、博士は作るべき機械の説明をする。

「ロボットっていつでも、もう新鮮じゃないよね。鮮度がないんだよ。」

ただ、演技ロボっていえば新しいと思わないかい？ 思うよね？

『ロボット自体が作られた物だから、存在自体が演技だ』なんてセリフはいらないからね？ いらないんだよ？

まだ誰も手をつけていないんだよ。つけられてないだけだと思うけどね。

それにさ、人形って事はだよ。分かるかな？ 分かるよね？

誰に言うでもなく、一人語る博士。誰も反応できないのを確認した後、

「どんな表情も、顔も思い通りさ。」

主役は常に美しく。これが物語りの醍醐味だと思うよね？ 思うハズだよな？」

うんうんと、一人うなずく博士は「じゃ、がんばろうか」と、当たり前のように会話を終わらせる。どうやらいつのまにやら、今日のの出来事が彼の生涯の夢になったようで「遂に私の夢が叶うんだね。叶うんだよね？」と誰彼かまわず問いかけていた。しかしなが

ら、頭と腕は確かなようで数年がかりでフィギュアロボを完成させてしまう。

作り上げた、ロボットの顔のベースは科学的に世界一の美女と認められたジュリア・ロバーツ。男の方は……まあ、それなりに……。

披露会では『世界初ロボットフィギュアスケート』と大々的に宣伝したおかげで会場は満員。取材陣が幾度となく博士を質問攻めにしている。

「フィギュアスケートのフィギュアは人形。人形といえば動く。動くといえばロボット。」

つまり、私のためにあるスポーツだったんだね。だったんだよ？」

自身満々に語る博士に、フィギュアロボのパンフをせっせと配る藤間助手。博士の話は、ロボットの開発思想から細かい技術的な会話まだ終了し、昨日食べた晩御飯をこれでもかと語り、今朝食べたご飯の話になっていた。

「今朝初めて『はえぬき』という山形のお米を食べただけだね。凄い美味しかったんだ。美味しかったんだよ？」

それでね、気になって調べてみたんだけどね——」

一人、二人といなくなる記者を脇目にみつっ、質問をこなす藤間助手。そして全ての記者がいなくなっても、雄弁に今晚食べたいお好み焼きについて熱く語る博士に「時間です」と告げる。博士は辺りを見渡したあと、

「おっと、みんないないと思ったら時間か。時間だったんだね」

何故いなくなったのかすら考えるまでもなく、プログラムのせいだと思った博士。藤間助手と解説席まで歩き始める。

「もつと僕の話聞いたかつたろくに。」

藤間君、次の機会にはもつと時間をとっておくべきだよ。べきなんだよ？」

「そうですね。考えておきます」

「考えるだけじゃダメだよ。」

動ける人間にならないとね。動けないから君はダメなんだよ？」
席につき、座ると丁度アナウンスが流れ始めた。まずは実際の人間による演技プログラム。躍動感のある滑りの中トリプルを跳び沸き立つ観客席。しかし、二度目のジャンプの着地に失敗し転倒してしまう。シナリオ通りにアナウンスが流れ、

「今回はわざと転倒していただきました。」

フィギュアスケートの世界では、ミスをしなない事が理想とされるだけあって

ミスをしなないで演技を終えるというのは、そう多くありません。皆様、思いませんか？

あそこでミスをしなければ、あそこでテンポが遅れなければ『最高』だったのに、と」

アナウンスの流れる中、人間のスケーターは退場していた。そして会場が暗転した後、曲が流れ始めアナウンスが続く。

「では、世界初のロボットフィギュアスケートペアです。」

完璧な演技をご覧ください」

人間よりもわずかに速いスピードで滑り、人間よりもわずかに速く回転し、人間よりもわずかに高くジャンプをするロボット。凄すぎる事なく、ギリギリに現実感のある運動をみせる。音と完璧にあった演技をし、表現する。まさに完璧な演技。

しかし、観客は静まり返っている。リンクの上で決めポーズのまま微動だにしないロボットペアを見て、観客の一人がこう言った。
「凄いね。まさに一心同体。完璧という言葉がすぐに思い浮かんだよ。」

でも、何だか現実なのに現実じゃないような」

観客は言葉を探し、手探りのように言う。

「うん。なんというか気持ち悪い。いや、気持ち悪いのとは違うかな。」

面白みがないんだ。何でだろう？ ドキドキしないんだよね」

別の場所では、記者がフィギュアスケートの解説者に話しかけていた。

「何で静まり返っているのかだって？ 決まっているじゃないか。彼らは二人だけど一つになる心なんて無いのだから。

ミスをするかもしれない。しないかもしれない。

そこに見る人、演技する人の心が重なるんです

演技者と観客が一心同体になるというのかな？ そういうことなんですよ」

それを聞いていた腹のた老機械工学博士。顔が引きつっていた。「博士、落ち着いてください」という藤間助手の声も届いていないようだった。後ろの方で「あんな売れないもん作ってどうするんだろうね」などと嘲る記者の声が聞こえ、プルプルと震えだす博士。

「ほら、博士。みんな分かってないですよ。

うんうん。分かってないんだ」

無理やりに何とか博士を抑えようとするが、

「何が分かっていないんだい？ 分かっていないと思うんだね？」

「そ、それは……」

もうマジでキレだす五秒前的な博士の声に、腰を抜かしそうになる藤間助手。顔を近づけながら博士は続け、

「分かっている人がいうもんなんだよ？ 分かる？ 分かるかな？

でも、本当に彼らは分かっているんだ。いないんだよ？

こんなに凄いロボット、あるはずが無いのに……」

ふと考え込む博士。

「そう、何も分かっていないんだ。分かっていないんだね。」

「ハ、博士？」

最大限の勇気を搾り出しつつ、藤間助手は博士の顔を見上げ気づいた。正月によく見る玩具のように二カ二カしている顔に。

結論からいうと、博士は大金持ちになった。心を持たないフィギュアは、練習相手に最適だったらしい。

「休憩しらずで、僕の練習に何時間でも付き合ってくれるんだ」

『説明！！フィギュアスケートのレベルが上昇した理由』と冠がついたスポーツ情報番組で流れた、フィギュアスケートの選手へのインタビュー。

「特にペアの練習には最適だね。危険な技を人形で練習し、成功率が上がったら人間と練習する。」

僕も相棒のジェーンの傷つく姿を見る事が減ったよ。

もちろん、ロボットのおかげで技術レベルも格段にあがったんだ」

深夜の通信販売のようなノリで編集された番組を見つつ、博士は藤間助手にこう言った。

「分かるかな？ 分からないかな？

適材適所。元からこれが狙いだったんだ。狙っていたんだよ？」

出ている腹をさらに出して自信満々に言っていると、パンパンと助手の背中を叩いた。出っ張った腹を見つつ藤間助手は思った。

「色んな意味で図太いな」

「何かいった？ いったよね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9574a/>

天才は踊る

2010年10月8日15時09分発行